

平成25年 2月

雑賀倫子 学位論文審査要旨

主 査 花 木 啓 一
副主査 兼 子 幸 一
同 吉 岡 伸 一

主論文

Physical and mental factors associated with obesity in individuals with mental disorders attending psychiatric day-care facilities

(精神科デイケアに通所中の精神障害者の肥満に関連する身体的および精神的な要因)

(著者：雑賀倫子、池田匡、吉岡伸一)

平成25年 Yonago Acta medica 掲載予定

学 位 論 文 要 旨

Physical and mental factors associated with obesity in individuals with mental disorders attending psychiatric day-care facilities

(精神科デイケアに通所中の精神障害者の肥満に関連する身体的および精神的な要因)

地域で生活する精神障害者は、一般住民より肥満やメタボリック症候群の頻度が高いことが報告されている。肥満はメタボリック症候群の危険因子の一つで、精神障害者の肥満には向精神薬を始め、生活習慣などさまざまな因子が関連している。一般住民を対象に生活習慣と肥満との関連性を検討した研究は多いが、精神障害者において生活習慣と肥満の関係を検討した報告は少ない。地域で生活する精神障害者にとって、精神科デイケアなどのリハビリテーション施設は、精神障害の再発防止や地域生活支援に有効で、利用者が多い。また、規則的な生活、コミュニケーション維持、社会参加や運動プログラムを提供する場としても活用されている。さらにデイケア施設内で体重管理プログラムが実施され、精神障害者の肥満予防の役割も期待されている。今回、精神科デイケアを利用している精神障害者の肥満の現状や関連する身体的および精神的な要因を、特に生活習慣との観点から明らかにし、肥満予防に向けた関わり方について検討した。

方 法

A市内の精神科病院2施設が行っているデイケアを利用する精神障害者111名を対象とした。身長、体重、体脂肪、腹囲、Body mass index (BMI)、血圧を測定した。体重、体脂肪、BMIは、体内脂肪計(TANITA、TBF-310)を用いて測定した。腹囲は、標準的腹囲測定法により計測をした。また、対象者の属性(年齢、性別、主疾患、生活環境)、健康習慣(朝食、間食、身体運動、睡眠、喫煙、飲酒、適正体重)、デイケアの通所期間、通所頻度、デイケアの満足度、自分の体型の満足度、抑うつ状態について調査した。健康習慣は、Breslowらの判定基準に従って、7つの健康習慣を調査し、評価した(以下Breslow得点)。デイケアの満足度と自分の体型の満足度は、Visual Analogue Scaleを用いて測定した。抑うつ状態の判定は、Geriatric Depression Scale短縮版15項目(以下GDS)を用いて評価した。対象者をBMIが25以上の肥満群、25未満の非肥満群に分け、肥満に伴う身体的および精神的要因について検討した。

結 果

調査対象111名より、108名の有効回答を得た。肥満群は全体108名のうち47.2%、男性では42.4%、女性では54.8%であった。対象者全体では、肥満群は非肥満群と比較して、体重、腹囲、体脂肪、収縮期血圧、拡張期血圧は有意な高値を示し、一方、体型の満足度、Breslow得点、GDS得点は有意な低値を示した($p < 0.05$)。男性の肥満群と非肥満群の比較では、腹囲、体脂肪、収縮期血圧、拡張期血圧は、肥満群の方が非肥満群に比べて有意に高値で、デイケア通所頻度、体型の満足度、Breslow得点は、肥満群の方が非肥満群に比べて有意に低値であった($p < 0.05$)。女性の肥満群と非肥満群の比較では、腹囲、BMI、体脂肪の指標のみが、肥満群の方が非肥満群に比べて有意に高値であった($p < 0.05$)。BMIと各因子との相関について、腹囲、体脂肪、収縮期血圧、拡張期血圧は正の相関を示し、デイケア通所頻度、体型の満足度、GDS得点、Breslow得点は負の相関を示した。

考 察

厚生労働省によると、成人の25.3%が肥満であると報告されているが、今回の対象者の肥満の割合は47.2%と一般人口に比べて高値であった。対象者全体では、肥満群は非肥満群と比べて、体型の満足度、Breslow得点、GDS得点が有意に低かった。同様に、男性患者の肥満群と非肥満群を比較すると、デイケア通所頻度、体型の満足度、Breslow得点で有意差を認めた。男性の精神障害者は、自身の肥満を認識しているが、現在の生活習慣を変えることが出来ずにいることが示唆された。さらに、BMIと身体的および精神的要因との相関を検討したところ、Breslow得点が負の相関を示したことから、健常者と同様に、精神障害者でも、毎日の生活習慣が肥満と関連していることが示唆された。最近、肥満、食習慣や規則的な運動について、デイケアスタッフによる心理教育プログラムを用いた介入が、体重増加やメタボリック症候群への発展を防止するために行われるようになった。精神科デイケアに通所している精神障害者の肥満防止のためには、生活習慣を変化させることが重要であると考えられた。

結 論

精神科デイケアに通所する患者は、肥満の割合が高いことが示された。また、健康習慣と肥満との間で負の相関関係を示したことから、日常的な健康習慣の改善が、精神障害者の肥満の軽減やメタボリック症候群の予防につながることを期待される。